京都帝國大學經濟學會

經濟論叢

第五十四卷 第四號

昭和十七年四月

論叢

利子勢力說……文學博士 高田保馬

廣域經濟と廣域分業……經濟學博士 谷口吉彥

熱帶農業經營の二つの型……經濟學博士 八木芳之助

世界恐慌後に於ける英國海運政策の轉換……經濟學士 佐波宣平

研究

マルサス『人口論』の倫理學的基礎……經濟學士 白杉庄一郎

協力工業とその問題の展開……經濟學士 田杉競

說苑

戰時經濟に於ける完全操業度……經濟學士 大塚一朗

岩瀨忠震の思想的背景……經濟學士 松木順

附錄

彙報

第五十四卷　四二六・第四號　六二

研究

マルサス『人口論』の倫理學的基礎

白杉庄一郎

一

さきに述べた如くマルサスは『人口論』の第一版に於て既に人口原理に基く人類進歩の障碍といふ絶望的な結論を緩和するために一種の形而上學的世界觀を持ち出し、その救濟を用意して終に道德的義務の思想に到達してゐるのであるが、[1] 第二版以後に於てはこの義務を一層詳しく展開し、諸害惡の根源たる人口原理をして不斷の向上を求めて止まぬ人間性と調和せしめんと努力してゐる。いはゆる道德的抑制の義務に關する議論が、それである。私はこの義務の基礎づけにあてられた議論を『人口論』の倫理學的基礎と呼ぶ。謂ふ意味は『人口論』の形而上學的基礎と云つた場合と同樣であつて、それが前提されなければ彼の人口原理は不斷の向上を求めて止まぬ人間性と正面衝突に陷り、その結果かれはこの原理を大膽率直に闡明するを躊躇せざるを得なかつたであらうといふ意味に於て、道德的抑制の義務と基礎づけてゐる倫理學的思想が『人口論』の據つて立つ根柢をなすと考へられるのである。さきに問題とした形而上學的基礎の補足として、なかんづく『人口論』が據つて立つ人生觀を

1) 拙稿『マルサス人口論の形而上學的基礎』經濟論叢、第五四卷、第二號。

一層明かに理解する目的を以て私はこゝにその倫理學的基礎を取上げる。

こゝに『人口論』の倫理學的基礎と題して扱ふマルサスの議論が形而上學的基礎の補足をなすといふのは、いはゆる道德的抑制の義務を基礎づけるに當つてマルサスはさきに見た如き理神論的とも云はるべき一種の形而上學的な思想を前提し、自然神學が彼の倫理學の基礎となつてゐるからである。

勿論マルサスの採る倫理學上の立場は一種の功利主義である。彼もまた一般的幸福の增減といふ觀點から見た行爲の結果もしくは效用を以て道德的價値判斷の規準となす。卽ち彼の見るところによれば、「效用(utility)は決して或る欲情の滿足に對する直接の刺戟ではあり得ないけれども、啓示された神の意志を別とすれば、それに恥るべきか恥るべきでないかを我々が知り得る唯一の試驗であり、從つて自然の光から集められ得る最も確實な道德的準則の規準である。」そして彼は理性的存在としての我々の例へば兩性間の欲情や他愛心の衝動に關する道德的義務について次の如く述べてゐる。

「兩性間の欲情と他愛心の衝動とはどちらもそれらに特有の對象によつて喚起される自然的欲情であつて、我々はそれらが伴ふ快感によつてその滿足に驅り立てられるのである。動物としては、或は我々がその結果を知るまでは我々の唯一の仕事はこれらの自然の指示(dictatis of nature)に從ふことである。然し理性的存在として我々はその結果に注意すべき最も强い義務をもつ。そしてもしその結果が我々自身または他人に對して害惡であるならば、我々はそのことをこれらの欲情のかういふ滿足の仕方が我々の狀態に適しないか又は神の意志に合致しない證據であると考へて差支へないであらう。それ故、かゝる特別の方向に於てそれらに耽溺するを制御することは、而してこのやうに注意深く我々の自然的欲情の結果を吟味し且つしばしばそれらを效用の試驗(test of utility)にかけることによつて弊害を伴ふことなく明かに人類の幸福の總量を增加し造物主の明白な目的を遂行するであらうやうな方向に於てのみそれらを滿足せしめる習慣を徐々に獲得することは、明かに道德的行爲者としての我々の義務である。[2]」

2) ibid. pp. 442-443.

右に見られる如く、マルサスの採る倫理學上の立場は疑ひもなく功利主義ではあるが、然しそれはベンサム流のそれではなくて、ウイリアム・ペーリー (William Paley, 1784-1805) によつて、代表される所謂神學的功利主義 (Theological utilitarianism) の範疇に屬するものであることに注意しなければならぬ。實際マルサスが倫理學上の一般的原理を持ち出すに際して引用してゐるのは主としてペーリーの『自然神學』(Natural Theology, 1804) や『道德哲學』(Principles of Moral and Political Philosophy, 1885) である。これらの書物は大して獨創的なものではなかつたが、當時大學の教科書として廣く使用されてゐたといふことである。ペーリーはロックの流れを汲むタッカー (Abraham Tucker) の追隨者で、彼によれば道德とは神の意志に從ひ人類に善を行ふことであつて、行爲が神意に適ふや否やは一般的幸福を增したか否かによつて知られる。即ち行爲の價値は一般的幸福を增減する傾向によつて判斷されると云ふのであつた。マルサスはこの種の神學的功利主義を大體そのまゝ採用するのであつて、彼の倫理學的主張の根柢にはペーリーの場合と同じく自然神學の思想が横つてゐたのである。その限り、彼が第一論文に於て『人口論』の形而上學的基礎づけに當てた「精神に關する理論」を第二論文に於ては削除してゐるにもかゝはらず、前者に見られる形而上學的思想は後者に於ても變ることなく存續してゐる。即ち彼は第二論文に於けると同じく宇宙の創定者としての神を前提し、人口原理に由來する害惡をこの神の警告と解することにより、その救濟手段を求めて道德的抑制の義務に到達するのである。項を改めてこの點に關するマルサスの思想を若干詳しく辿つて見たいと思ふ。

二

マルサスの見るところによれば一般に「自然的ならびに道德的害惡は我々の生存に適せず從つて我々の幸福を

害ふ如き行爲は何でも之を避けるやう我々に警告するために神によつて使用される手段であるやうに思はれる。」例へばもし我々が飲食に際して不節制であるならば、我々の健康が害はれる。またもし我々が憤怒して逆上するならば、大抵我々は後で悔いるやうな行ひをしでかすであらう。またもし我々が餘りに急速に增加するならば、我々は貧困と傳染病のために慘死する。これらは總て自然の法則なのであるが、而もこれらの法則は我々がそれらの衝動に從ひすぎて、そのために等しく注意するを要する或る他の法則を侵すに至つたことを示すものである我々が飽食から受ける不快や憤怒によつて我々自身または他人に加へる損害および我々が人口過剩の結果蒙る不都合は總てそれらの衝動を一層よく調節せよとの警告である。そしてもし我々がこの警告を顧みなければ、當然我々は不從順の罰を蒙るのであつて、而も我々の苦難は他の人々に對する戒めとしての作用をもつのである。[3]

右の如く我々が自然的衝動または欲望に盲從するならば、惡が結果する。然し自然の欲望は總て我々の生存に缺くことのできないものであつて、それを衰弱せしめたり減退せしめたりすれば必ずや我々の幸福を害はずには置かないと信ずべき理由がある。我々の總ての欲望の中で最も强力にして普遍的なのは衣食住に對する欲望であるが、これらの欲望は人類文明の原動力であると言つてよい。つまり我々は指導宜しきを得ればこれらの欲望から無限の利益を獲得するが、然らざる場合には害惡を惹起する。しかも欲望はいづれの場合にも等しく自然であり、抽象的に考へると等しく善なのである。[4] 同じことは兩性間の欲情についても云へる。この欲情は我々の欲望のうち食欲についで强力にして一般的なものであるが。それは一方に於ては人間の幸福の主要な成素の一つであると同時に、その變則的な滿足から多くの害惡が發生する。卽ち、「兩性間の欲情の明白な目的は種の存續であり、二人の間に彼等の幸福を最もよく促進し且つ同時に幼兒の無力や次の世代の教育に對する適當な注意を確保

3) Principle of Population. 7th ed. p. 390.
4) ibid. p. 391.

するやうな意見と關心の緊密な結合を形成することである。然しもし各人が結果を考慮せずに常にこの欲情の滿足についての自然の衝動に從ふならば、これらの重要な目的の主要部分は達成されず、種の存續さへ亂交によつて不可能になることがあるであらう。[5]」このやうに自然的衝動は一般に二面的傾向をもつてゐて、その滿足が適度であれば善であるが、それに盲從すれば惡が結果する。かくの如き自然的衝動の二面的傾向からマルサスは人間の道德的義務を推論して來る。即ち曰く。

「實際、一切の人間の欲情は我々の一切の快樂の材料でもあれば、我々の一切の苦痛の材料でもある。我々の一切の幸福の材料でもあれば我々の一切の窮乏の材料でもある。我々の一切の德の材料でもあれば我々の一切の惡德の材料でもある。それ故、必要なのは調節と指導であつて、減退もしくは絕滅ではない。

「それ故、理性的存在としての我々の德は、明かに、造物主が我々の指揮下に置いた一般的材料から人間の最大幸福を引出すにある。そして自然的衝動は抽象的に考へると善であり、ただその結果によつて區別され得るにすぎないから、これらの結果に對して嚴重な注意を拂ひ、それに應じて我々の行爲を調節することが我々の主たる義務と考へられねばならぬ。[6]」

以上が自然的衝動一般に對するマルサスの態度であるが、この態度を以て兩性間の欲情を基礎とする人類の生殖力に向ふ時に結果してくるのが、いはゆる道德的抑制の義務である。

マルサスによれば、人類の生殖力は食物の生產力よりも大きく、人口は食物よりも速かに增加する。この意味に於ける所謂人口原理は一面に於て人間を勤勉ならしめ地球に人を滿さんとする神の意圖を體現したものである然るに人口原理は同時にまた樣々の害惡の根源であるといふ今一つの側面をもつてゐる。然し彼の見るところによれば、人口原理に由來する害惡は、他の自然的ならびに道德的害惡と同じく、その害惡を避けしめんとする神の警告もしくは自然の訓戒である。自然は「我々の苦惱を弄び絕えず我々の勞苦を挫折せしめんとする意圖をも

5) ibid. pp. 441-442.
6) ibid. p 394.

つた氣まぐれな神の態度ではなくて、我々に對して總ての部分を鞏固にし惡德と窺乏を地上から追拂ふやうに敎へる意圖をもつた親切ではあるが時として嚴格な敎師の態度」で以て、「我々が子供を養ふことができるやうになるまで結婚を差支へ、その時期の來るまで純潔を守る」やう訓戒する。[7] 神ないし自然のこの訓戒に聽從しつゝ地球に人を滿さんとする神や自然の目的を實現するといふことが、いはゆる道德的抑制の義務である。

「人類の生殖力はその大眼目に於ては他の總ての自然法則と全く同種の一法則である。それは强力かつ一般的であつて、著しく減退せしめると必ずやその目的に副はなくなるであらうことは明かである。それから生ずる害惡は强力にして一般的といふことれらの必然的性質に附隨するものであつて、これらの害惡は人間の努力と德行とによつて大いに緩和され比較的輕微なものたらしめられ得る。我々は地球が滿されるといふことが造物主の目的であると考へざるを得ない。そしてこれは人口が食物よりも速かに增加する傾向がなければ實現され得ないであらうといふことは私にとつて明かであるやうに思はれる。そして增加に關する現在の法則を以てしても地球に人を滿すことは極めて速かには進まないのであるから、我々は疑ひもなくこの法則がその明白な目的に對して强すぎはしないと信ずべき若干の理由をもつ。生活資料の供給よりも遙かに速かに增加せんとする人口の强力にして普遍的な努力がなかつたならば、生活資料に對する欲望は比較的に局限され、人間能力の改善に極めて必要なかの一般的活動を招來することができないであらう。もしこれらの二つの傾向が正確に均衡を保つとすれば、周く承認されてゐる人間の怠惰を克服し彼をして土地の耕作に進ましめるに足るほど强力な如何なる動機があるであらうか私は知らない。……それ故かかる均衡は明かに創造の一大目的を挫折せしめるであらう。

「人口が餘りに速かに增加しないといふことは人類の幸福にとつて最も重要であるが、成就さるべき目的が結婚の欲望の減少を許さないであらうと思はれる。自分の子供を扶養する見込がつくまで結婚しないといふことは明かに各個人の義務である。然し同時に各個人がこの見込を實現するやう自ら努力し且つより多數を養ふ用意をするやう刺戟されるために彼が結婚の欲望を減退せしめずに保持することが望ましい。

「それ故、人口原理に關して要求されるのは明かに調節と指導とであつて、減退もしくは變更ではない。そしてもし道德的抑制がこの原理から起つてくる附隨的害惡を避ける唯一の道德的な方法であるとするならば、それを實行すべき我々の義務は明か

7) ibid. pp. 413-414.

に他の何れかの德を實行すべき我々の義務と正確に同一の基礎に立つものであらう。[8]」

右の如くマルサスは人口原理に由來する害惡を以てその害惡を避けしめるための神の警告もしくは自然の訓戒と解し、この訓戒に聽從して「我々が子供を養ふことができるやうになるまで結婚を差支へ、その時期の來るまで純潔を守る」といふこと、即ち人口增加の道德的抑制を以て我々の義務となす。(註)「子供を養育する手段なくして結婚することほど直接に一般的幸福を減少せしめる傾向のある行爲は恐らく少いであらう。それ故このやうな行をなす者は明瞭に神の意志に逆ふものである。そして自分の生活する社會の重荷となり、自分自身および家族を他の如何なる場合に於けるよりも道德的習慣を維持することの困難な境遇に陷れてしまふものであるから、彼は隣人および自分自身に對する彼の義務を犯し、かくして彼のより高い義務に反して欲情の聲に聽從してしまつたやうに思はれるのである。[9]」マルサスは一般の道德學者に對して、自分の子供を養育する見込がつくまで結婚しないといふ意味に於ける道德的抑制を各個人の明白な道德的義務の一つとして確立することの必要を强調して、かうも言つてゐる。「私は道德および宗教が社會の幸福に及ぼす影響を大いに重視したく思ふ者である。然し道德的義務の中に私は云ふまでもなく家族扶養の合理的な見込のない場合に於ける早婚の意嚮に對する抑制を含める。そしてこの種の道德的克己が道德の中に含まれないならば、如何なる程度の宗教や道德も如何なる程度の人格や財産の合理的な自由や安全も現存する自然法則の下に於ては社會の下層階級を安樂と豐富の狀態に置き得ないのである。」と。[10]

(註)　マルサスの所謂道德的抑制は「我々が子供を養ふことのできるやうになるまで結婚を差支へ、その時期の來るまで純潔を守る」といふことであつて、その中には獨身期間に於ける純潔の保持といふことが含まれてゐることに注意しなければならぬ。彼

8) ibid. pp. 394–396.
9) ibid. pp. 401–402.
10) ibid. p. 521.

の見るところによれば、純潔の原則が侵犯されると必ず害悪が生れる。然し彼は同時に或る程度現實に妥協し、獨身時代に於ける完全な純潔を要求することによつて道德的抑制を不可能にならしめるほどの理想主義者でなかつたといふことに注意しなければならぬ。[11] 結婚に對する戒慎的阻止の行はれるかぎり、たとへ獨身期間中に純潔の德が完全に守られないにしても、人口原理に由來する二大害悪のうち、悪德はともかく、少くとも窮乏のみは除去される。悪德が完全に除去されるためには純潔の德が嚴守されねばならぬが、マルサスの關心は人口原理に由來する二大害悪のうち主として窮乏の方に向けられてゐたのであつて、而も彼は正しくも窮乏こそもろもろの悪德の根源であると考へたのである。[12]

三

右の如くマルサスは子供を養育する見込のつくまで結婚しないといふことを以て人口の道德的抑制と呼び、道德的抑制を以て人口原理に由來する害悪を回避するための各個人の義務となす。それは飽くまでも一種の人口制限であると考へなければならない。然しながら、この意味の人口制限は所謂產兒制限と異るといふことに注意しなければならない。なるほど道德的抑制もまた或る意味に於ては產兒を制限するものである。然しそれは產兒の根本原因すなはち結婚を差控えることによつて產兒を制限するものである。然るに所謂產兒制限は結婚そのものを抑制することなく、結婚の結果たる子供の出生のみを人爲的に制限せんとするものである。しばしば注意されてきた如くマルサスは所謂マルサス主義者とは異るのであつて、彼は決してこの種の產兒制限を承認しない。

「實際、私は常に人爲的にして不自然な人口阻止の如何なる方法をも非難しなければならない。と云ふのは、それは不道德的であり、勤勉に對する必要な刺戟を除去する傾向をもつからである。もし各夫婦が希望通りにその子供の數を制限することができるならば、確かに人類の怠惰は大いに增加せしめられ、個々の國々の人口も全地球の人口も決してその自然的にして適當な大きさに達しないであらうと恐るべき理由がある。然し私が推奬してきた抑制は全く異つた性格のものである。それは理性によつて指示され宗教によつて是認されるのみならず、最も著しく勤勉を刺戟する傾向がある。時に望ましいが然し勤勉や節約および戒慎の習慣の獲得によつてのみ安樂に享受され得る狀態として結婚を期待することほど、努力や善行に對する强力な奬勵は容易

11) ibid. p. 499.
12) ibid. pp. 403, 410.

に考へられないのである。」[13]

マルサスにとつては、人口原理は人間を勤勉ならしめ地上に人を滿さんとする神の意圖を體現したものであつた。從つて彼が人爲的人口制限を就中勤勉に對する必要な刺戟を除去する傾向をもつたものとして之に反對してゐるのは首尾一貫してゐると云はねばならぬ。而も注意すべき點は彼が、彼の推奬する道德的抑制は最も著しく勤勉を刺戟する傾向があるのみならず、それは地球に人を滿さんとする神ないし造物主の目的と毫も牴觸するものでないとしてゐる點である。彼もまた「生よ繁殖よ地に滿盈てよといふ造物主の本源的命令」(the original command of the increase and multiply and replenish the earth) に從ふことが人間の義務であると確信し、[14]「現實の大人口 (a great actual population) と赤貧や隷屬の殆んど存在しない社會狀態」とをもつて大いに望ましい二つの事柄としてゐる。[15] 卽ち彼は貧民の狀態を本質的かつ永久的に改善し赤貧や隷屬の存在しない社會狀態を實現する方法を探究することを以て『人口論』の中心的な實踐的課題となし、その方法を人口の道德的抑制に見出したのであるがしかもその道德的抑制は同時に大人口を現實に確保する方法でもあつたのである。彼はこの點に關する彼の眞意を明かにして次の如く述べてゐる。

「もし私が本書の主要傾向に關して讀者の理解を得ることに成功してきたとするならば、讀者は私がその國の扶養し得る以上の子供を生んではならぬと考へる本當の理由は、生れた子供のできるだけ多くが扶養され得るやうにと願ふためであることに氣づかれるであらう。事物の性質上、我々が何らかの方法に於て貧民を救助すれば、必ず、彼等は一層多くの子供を養育して成人せしめることができる。而してこのことは個人にとつても社會にとつても何物にもまして望ましい事柄である。[16]

「私は人口の如何なる可能的增加も、それが惡德と窮乏の割合を增加せしめないかぎり、決して害惡とは考へて來なかつた。惡德と窮乏そしてこれのみが、私の大いに抗爭してきた敵なのである。[17]」

13) ibid. p. 512.　14) ibid. p. 483.　15) ibid. p. 406.
16) ibid. p. 472.　17) ibid. p. 511.

右の如くマルサスは「生よ繁殖よ地に滿盈てよ」といふ造物主の命令に從つて惡德と窮乏を伴はぬ大人口を實現することを以て人間の義務と確信するのであるが、而も彼はこの義務を遂行するためには同時に道德的抑制の義務が守られねばならぬと考へるのである。

「造物主によつて人間に與へられる明白な命令は造物主が前以て設けて置いた偉大にして一樣な自然法則に從屬して與へられるのであつて、我々をして或る特定の戒律を一層容易に遂行するを得せしめるためにこれらの法則が變へられるであらうと期待することを我々は理性によつても宗教によつても禁じられてゐる。もし人間が奇蹟的に食物なしに生きるやうになされ得るならば地球が極めて速かに滿されるであらうといふことは疑ひもなく眞實である。然し我々はかゝる奇蹟がこの目的のためにはたらかしめられるであらうといふ希望の最も些少な根據をもたないから、造物主が種の增殖のために設けてきた法則を研究することが理性的な創造物として且つ我々の造物主の命令を遂行するといふ目的から見て我々の積極的な義務となるのである。そして我々がこの法則の思辨的考察のみならず我々の感覺の遙かに力强く差迫つた示唆から人間は食物なくしては生き得ないといふことを知る場合に、その扶養手段を無視して人口を增加せしめることにより我々の造物主の意志に從はうと試みるのは、穀物がその適當な養分を受取ることのできない道傍や垣根にそれを蒔くことによつて豐かな收穫を得ようと試みるのと全く同種の愚行である。[18]」

道德的抑制の義務を遵守することによつて造物主の目的はよりよく達成される。造物主がこの目的を達成するために設けた自然法則に伴ふ害惡は道德的抑制によつて除去され、その目的は一層有效かつ適確に實現されるからである。從つて道德的抑制は造物主の命令に反するどころか、「自然と理性の光によつて、我々に指示され且つ啓示によつて確認され是認された義務」であり、「最も聰明な古代の哲學者たちが自然法則から演繹し、キリスト教の道德律に於て直接に教へられ且つ極めて有力な是認を受けてきた義務」なのである。マルサスは書いてゐる。「單に自然の光から判斷しただけでも、もし我々が一方に於ては過剩人口から貧困が生じ他方に於ては亂交から特に女性に對する害惡と不幸が生ずることを確信するならば、功利の原則を道德律の大規準と認める人は

18) ibid. p. 484.

何人といへども、道德的抑制すなはち我々が家族を扶養し得る狀態に達するまで結婚を差控えその期間完全に道德的に行爲するといふことが義務の正道であるといふ結論を如何にして免れ得るかを私は知らない。而して啓示が考慮に入れられる場合には、この義務は疑ひもなく有力な確認を受けるのである。[19]」と。

四

さらに注意を要する點は、マルサスが道德的抑制を前提するかぎり人口原理に伴ふ害惡の廻避され得るものであることを明瞭にしてゐることである。彼は或る個所で、「過剩人口あるひは言ひ換へると極めて低い勞賃と職業の缺乏とから起つてくる貧困と悲慘は絶對に救治し得ざるものであつて、地球の人口が增大するにつれて絶えず增大して行かざるを得ない。そして立法上の智慧と私的慈善との一切の努力は人間の德の健全にして有益な行使を與へ且つ時折は分配を變更し人間の窮乏の壓力を變化せしめ得るけれども、この壓力の總量を減少せしめたりその增大を抑制したりする方向には絶對に無力なのである。[20]」と述べてゐるが、これは飽くまでも道德的抑制の義務が無視される限りに於てゞあると解釋されなければならない、道德的抑制は過剩人口そのものを除去もしくは緩和するものである。從つてそれが前提されるかぎり、人口原理に由來する害惡は不可避にして輕減され得ざるが如きものではない。彼は明瞭に述べてゐる。

「人口原理から起つてくる害惡は苦情を惹起することのより少い大部分の他の害惡と全く同じ性質のものであり、人間の無智と怠惰によつて增加せしめられ、人間の知識と德とによつて減少せしめられる、またそれは各個人がその義務を嚴格に果すと假定すれば殆んど全て除去されるであらう。しかもこのことは正しくも人間の幸福の主たる要素と認められてきた調節された欲望滿足から起つてくる快樂の源泉の何ら一般的減少をもたらすものではないのである。[21]」

この見地からマルサスは道德的抑制を以て人口原理に由來すると彼の考へる害惡すなはち惡德と貧困を除去ま

19) ibid. p. 403.
20) ibid. p. 513.
21) ibid. p. 403.

たは緩和する最も合理的にして適切な救治策となすのである。實際、道德的抑制こそは彼の推奬する唯一究極の救貧手段であつたのである。然し今はこの點に立入ることを止めて、人口原理に由來する害惡の救治手段としての道德的抑制をぐめる今一つの興味あるマルサスの形而上學的主張を見て置きたい。

マルサスは道德的抑制を前提する以上、人口原理がたとへ害惡を隨伴するにしたところで、それは神の法則たることゝ牴觸するものではないと主張する。人口原理すなはち「生活資料以上に增加せんとする人口の不斷の傾向」に關する理論が贊同を得がたい一つの理由として、自然の法則によつて生存し得ないやうな人間を神が生み出すとは信じられないからと主張される。然し人口原理をめぐる自然法則によつて人間は勤勉ならしめられる、のみならずそれに附隨する害惡は道德的抑制によつて除去され得るのであるから、人口原理の承認は神の仁慈に對する非難の根據たり得ない。實際、各個人は道德的抑制を實行することによつて人口原理から結果する自分自身および社會に對する一切の惡結果を除去することができ、またこの德が或る程度實行されるならば個人の幸福を減少せしめるよりはむしろ增進せしめるに役立つと信ずべき理由があるのであるから、「神の一般法則がこの德を必要ならしめこれに對する我々の違反を惡德に附隨する害惡と種々の形の夭折に伴ふ苦痛とによつて處罰する」からと云つて、神の正義を非議する謂はれはないとして、彼は述べてゐる。

「惡德に伴ふ苦痛によつて我々をして惡德を止めさせ、德行の生む幸福によつて我々を德行に導くのは造物主の明白な目的である。我々の觀念によれば、この目的は慈悲深い造物主にふさはしいものである。人口に關する自然の法則はこの目的の促進に役立つ。それ故、これらの法則を根據として神の慈悲心を非難することはできない、かゝる非難は萬有の不完全な狀態に附隨する如何なる害惡に對しても等しく適用され得ないのである。[22]」

人口原理から起つてくる害惡は人間の欲情一般の過度または不規則な滿足から起つてくる害惡と全く同じ性質

22) ibid. p. 402.

のものであつて、人間の欲情から起つてくる惡德の存在する故を以てこれらの欲情が統制と指導の代りに減少もしくは絶滅を必要とすると推斷すべき理由のないのと同樣、人口原理から起つてくる害惡の存在を根據として人口增加の原理が造物主の意圖する目的にとつて强すぎると結論すべき理由はない。人口原理によつて惹起されると認められる害惡にもかゝはらず、事物の現狀に於てはそれから生ずる利益はそれらの害惡を相殺して大いに餘りがあるのである。マルサスは人口原理に由來する有益な效果について述べてゐる。

「人口原理から結果する有益な效果について私は、生活資料の可能な增加よりも速かに增加せんとする人類の自然的傾向は人間の能力の改善と人間の幸福の增進とに極めて必要な社會に於ける向上の希望と沒落の恐怖とを減ぜしめることなしには破壞もしくは著しく減少せしめられ得ないと確信してゐる。然し、心中から確信してはゐても、私は人口原理から起つてくる害惡について私が與へてきた見解を變更したいとは思はない。これらの害惡は幸福によつて相殺されて餘りがあるからと云つてその名稱や性質を失ひはしない、而してこのためにそれらを異つた光に於て考察し且つそれらを害惡と呼ぶことを止めるのは、欲情の不規則な滿足を不道德と呼ぶのに反對し、我々の欲情が人間の德行や幸福の主要源泉であるからと云つてそれらが窮乏に導くと確信するのに反對するのと同樣に不合理であらう。

「私は常に人口原理を訓練の狀態（a state of discipline and trial）に特に適した法則と考へてきた。實際我々が知つてゐる自然の法則の全體の中でかくも著しく地上に於ける人間の狀態に關するこの職書に準據した見解を硬化し確證するものは指摘され得ないと私は信ずる。そして各人は自然の光によつて明かに彼に命令され啓示宗教によつて是認された德の實行によつて人口原理から結果する自分自身および社會に對する惡結果を避ける力をもつてゐるから、人間に對する神の道は自然のこの大法則に關しては完全に擁護されてゐると認められねばならぬ。[23]」

これはマルサスが一八一七年の第五版に附加へた附錄からの引用である。彼はこゝでは人口原理を訓練と試練の狀態に特に適した法則と考へてきたと言つてゐるけれども、この點に關し第一論文に於ける彼の思想は幾分異つてゐた。そこでは彼は次の如き見解を示してゐる。「人口原理に由來する困窮は人間に對する不斷の壓迫は我

23) ibid. pp. 525-526.

々の希望を未來に向けしめるやうに思はれる。」すなはち「生活の困難に由來する困窮の人間に對する不斷の壓迫についての考察から結果する人生觀は、人間が地上に於ける完成の可能性については合理的な期待を殆んど懷き得ないことを示すことによつて、人間の希望を深く未來に向けしめるやうに思はれる。我々が吟味してきた自然法則の作用から人間が必然に陷らざるを得ない誘惑は、世界が從來しばしば考察されてきた如く、幸福の最高狀態への準備たる試練および德の鍛錬所の狀態(a state of trial, and school of virtue)であると思はせるやうに見えるであらう。」しかし「試練の狀態は神の明識に關する我々の觀念と矛盾する。」地上に於ける人間の地位は我々が我々の周圍に觀察する樣々の自然現象ともつと矛盾せず、神の力や恩寵や明識に關する我々の觀念と一致したものである、と。[24] 然し彼は人生を試練と見るキリスト教的立場と調和しないこの種の人生觀を固持することはできなかつた。實際、『人口論』に對する數多くの反對のうちキリスト教的道德を盾とするものがマルサスにとつて最も手痛いものであつたやうであつて、彼は『人口論』の主張をキリスト教の教說と調和せしめるために苦心するところが多かつたのである。[25] 第二論文に於ける道德的抑制の强調もまたこの意味をもつてゐたと考へられる。人生に纏綿する害惡を試練と見る思想について云へば、彼は既に一八〇七年の第四版に初めて附加された附錄に次の如く述べてゐる。「私は人生の殆んど總ての害惡は人爲的制度に影響を及ぼす人々の邪曲と惡業とがなかつたならば最も容易に除去されるであらうといふよりは、むしろ、或る眞實にして根ざすところ深き困難が存在してゐて、それとの不斷の鬪爭は生來不活潑な人間を奮起させ彼の能力を呼び出し彼の精神を活潑にし改善するのであり、試練の狀態に最も顯著かつ特別に適してゐると認められねばならぬ一種の困難と信じたく思ふのである。」[26] と。

24) First Essay on Population 1798, reprinted London 1926, pp. 348–349.
25) Principle of Population, 7th ed. p. 526.
26) ibid. p. 506.

私は『人口論』の根柢をなすマルサスの倫理學的思想がどの程度まで正確にキリスト教的道德に合致するものであるかどうかを今直ちに明言することができないけれども、然しその根柢には飽くまでもキリスト教的な考へ方が横つてゐることは否定できないと思ふ。マルサスの哲學的思想を吟味してきて先づ注意を惹く點は、彼が世界を神の創造過程と見て調和的な宇宙の創造者を信奉してゐる點であらうが、この種の世界觀がキリスト教的であることは云ふまでもなからう。次に注意を惹くのは、この創造者によつて創られる人間が生來怠惰にして不活潑なものであり、彼を驅り立てゝ努力せしめるためには强烈な不斷の刺戟が必要であると考へられてゐる點であるが、このやうな人間觀は單に人間存在の空間性を無視した抽象的普通主義の現れであるのみならず、また同時にキリスト教的であり、云はゞ一種の原罪思想ではないかと思ふ。私は以上二回にわたつて敍述してきたマルサスの世界觀ないし人生觀も實のところこの種の人間觀を前提して初めて意味をもち得たものであると考へたいのであるが、次の機會に『人口論』の根柢となつてゐる哲學的思想の批判を兼ねてその人間觀的基礎を問題にして見たいと思つてゐる。